

## 5. 古代の水田開発について

荒砥前田 遺跡では、谷部・低地部および微高地部の一部で複数の洪水層が検出され、その直下で水田・溝が検出された。このうち、1区谷部に堆積していた第2洪水層は、灰黄褐色の砂および小礫で、厚さ10～20cmで谷全体にほぼ水平に堆積していた。第2洪水層の堆積した時期は、下位に榛名二ツ岳火山灰があり、上位に浅間Bテフラがあることから、6世紀初頭以降、1108(天仁元)年以前ということになる。

これと外見が酷似した洪水層が1区微高地部北半部でも検出されている。この洪水層は黄色小砂礫で、厚さ5cmほど堆積していた。離れた地点であるので断定はできないが同時期に堆積した洪水層の可能性がある。また直接の対比は難しいが、層位が共通する洪水層として、4区低地部第5洪水層、4区台地部洪水層をあげることができる。洪水層の顔つきは同じ洪水でも地点によって異なるので、断定は難しいが、4区の洪水層も同時期の堆積物の可能性は高い。

これらの洪水層の層位は、下位の榛名二ツ岳火山灰降下以降、上位の浅間Bテフラ降下以前であることから、818(弘仁九)年の地震に伴う洪水層に対比できると推定される。この818(弘仁九)年の地震は、赤城山南麓地域で地割れや土石流等の大きな

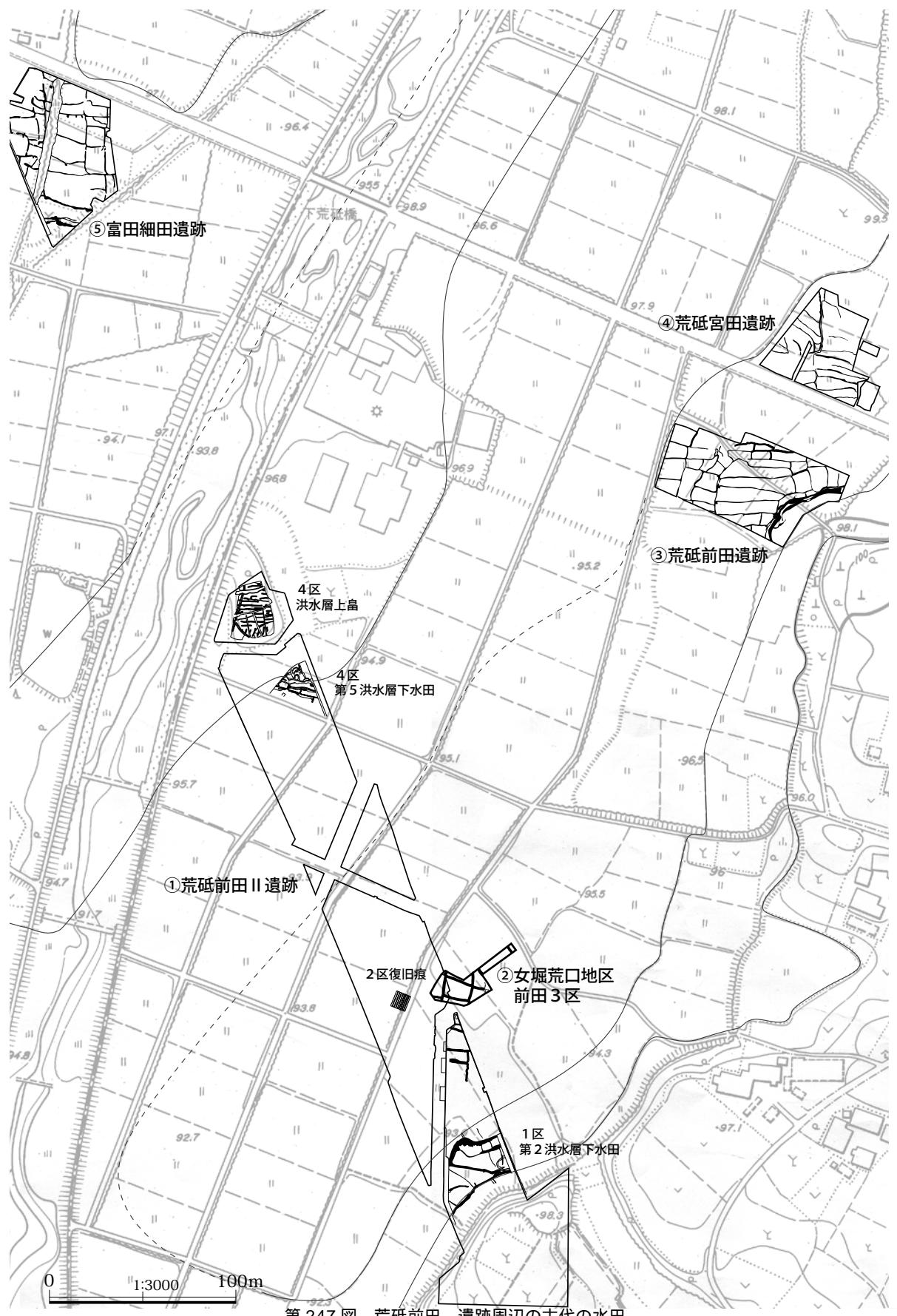
被害を引き起こしたことが多くの発掘調査結果から判明している。荒砥前田 遺跡1区第2洪水層下で検出された水田耕土中および溜井や溝から出土した土器は、破片であるが、8世紀ころのものと見られ、この水田の耕作時期を表していると考えられる。したがって水田を覆う洪水層の時期を、818(弘仁九)年としても問題がないと考えられる。

荒砥前田 遺跡周辺では、この818(弘仁九)年の地震に伴うと推定される洪水層で埋まった水田が複数の遺跡でみつかっている。第17表に概要をまとめ、第347図に位置を示した。

荒砥前田 遺跡を含む5遺跡の洪水層下水田を比較検討すると、共通しているのは、傾斜地あるいは微高地上に立地することである。これまでの埋没水田研究によって、群馬県では古墳時代後期には傾斜地の水田開発は開始され、傾斜地を水田化するために盛んに小区画水田が造成されたことがわかっている。高崎市や渋川市の榛名山起源の6世紀の火山灰および軽石が埋没している地域では、古墳時代の傾斜地開田の過程が観察できる遺跡が多く分布する。しかし、赤城山南麓地域では6世紀のテフラが純堆積層で残らないことから、6世紀の埋没水田の検出例は極めて少なかった。この818(弘仁九)年の地震に伴う洪水層で埋まった水田の検出は、9世紀初頭まで下るが、時期の分かれる傾斜地・微高地水田が検出できたという点で重要である。

第17表 荒砥前田 遺跡周辺の818(弘仁九)年地震に伴う洪水層下水田一覧

番号	遺跡名	調査年	調査主体	調査原因	遺跡の内容
	荒砥前田 遺跡	1981(昭和56年)	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	県営圃場整備事業 荒砥北部地区	本遺跡
	女堀荒口地区前田3区	1981(昭和56年)	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	県営圃場整備事業 荒砥南部地区	中世初期の農業用水堀である女堀のトレンチ調査で洪水層下水田が検出された。荒砥前田 遺跡の1区北半部の黄色洪水層下水田と隣接する。アゼの方向も一致している。荒砥前田 遺跡の調査時にはトレンチの位置は確認できなかったが、洪水層下面の標高をみると女堀荒口地区前田3区は93.25m、荒砥前田 遺跡1区北端は93.20mで同一面として問題ないと思われる。ただし、女堀荒口地区前田3区では洪水層上に直接浅間Bテフラが堆積している層序が報告されており、違和感がある。
	荒砥前田遺跡	1981(昭和56年)	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	県営圃場整備事業 荒砥南部地区	発掘区全面で弘仁九(818)年の地震に伴う洪水層に埋まった水田と台地下に掘られた溝を検出した。水田域は砂壤土性の微高地に、溝は東台地との間にある低地内に掘られていた。
	荒砥宮田遺跡	1983(昭和58年)	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	県営圃場整備事業 荒砥北部地区	1区の南西部で弘仁九(818)年の地震に伴う洪水層に埋まった水田と溝が検出された。水田がみつかったのは、ローム台地から砂壤土性の微高地に移る傾斜地で、南側の荒砥前田遺跡の水田に連続していると推定される。両遺跡の水田の東西方向に長い区画や、水田標高の合致から、同時期の水田面の可能性が高い。
	富田細田遺跡	1999(平成11年)	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	一般国道17号(上武道路)改築工事	荒砥川右岸に分布する。台地から低地へ移る緩斜面のC区で洪水層下の水田を検出した。洪水層はにぶい黄褐色土や灰白色砂質土である。耕土には榛名二ツ岳火山灰を含み、上位に浅間Bテフラが堆積していた。報告では弘仁九(818)年の地震に伴う洪水層の可能性を示唆している。



## 6. 女堀の掘削年代について

しかも荒砥川左岸の荒砥前田 遺跡・女堀荒口地区前田3区・荒砥前田遺跡・荒砥宮田遺跡は、矮小ながら1区谷部と呼称した東側の谷地とその西側に細長くある微高地上でつながった一連の遺跡である。すなわち微高地および帯状低地の同一地形面に同時期の埋没水田が検出されていることになり、広域な水田稻作の展開が想定できる。この微高地水田の開田時期は明らかでないが、荒砥前田 遺跡1区北半部では、水田耕土の下位で古墳時代前期の住居群を検出していることから、それ以降ということになる。

この水田域を耕作した集落は明らかになっていない。水田が経営されていた可能性がある古墳時代中期から平安時代初頭までの住居が検出されたのは、荒砥前田 遺跡の2区15号住居と荒砥宮田遺跡1・2区の33軒で、いずれも古墳時代中期から後期の住居であった。このことから本地域の微高地水田が古墳時代中・後期に開田された可能性も十分あり得る。しかし、水田の各発掘区で少量ながらも出土した土器は、8世紀の土師器破片のみであったことから、奈良時代の可能性が最も高いと推定される。奈良時代の遺構は周辺では見つかっていないので、今後の周辺調査の際には、注目しておかなければならぬだろう。

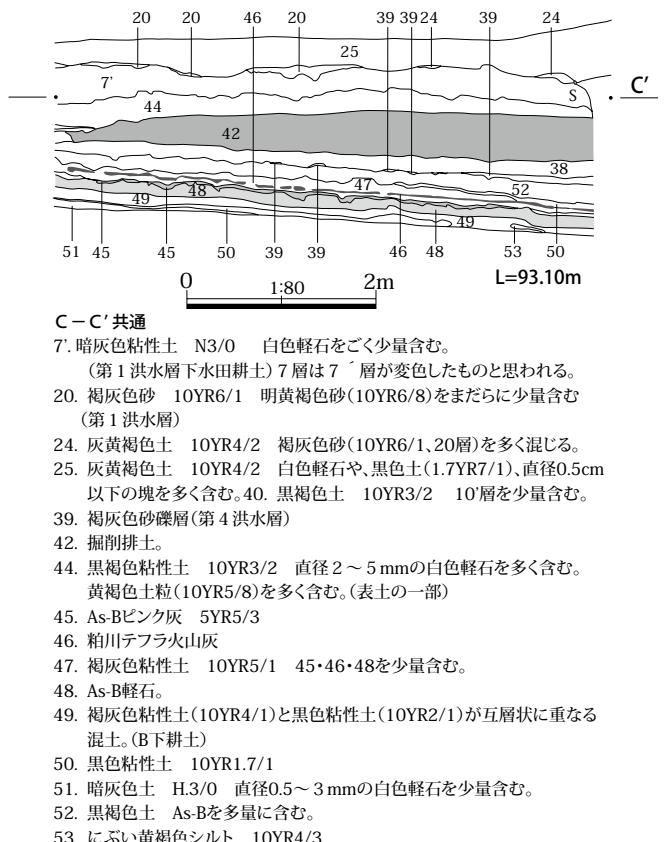
## 6. 女堀の掘削年代について

女堀は赤城山の南麓を東西12.8kmにわたって掘削された中世初期の用水路である。1979年から1982年にかけて、県営圃場整備事業等に伴って7地点が発掘調査されている。今回の荒砥前田 遺跡の調査では、女堀の西岸に残る掘削排土の堆積を検出した。特に3区西壁の低地部の土層では、厚さ0.55mの女堀掘削排土の下位に「浅間粕川テフラ」と「浅間Bテフラ」の二つのテフラを検出した。

第248図は、3区西壁の共通土層断面C(第168図)の抜粋・拡大図である。この土層は4区低地部東端の南北断面にあたり、下位に浅間Bテフラ(45層・48層)が堆積していた。浅間Bテフラ

の下半は厚さ10~12cmの軽石層、上半は厚さ2cmほどのピンク色火山灰である。その上位には軽石やスコリアの堆積はなく、直接褐灰色粘性土が1~2cmの厚さで堆積していた。軽石や火山灰を少量含むと記載が残っている。その上に浅間粕川テフラが厚さ0.5~1cmほど堆積していた。堆積の様子は谷縁の傾斜地では途切れ途切れで、平坦部分ではほぼ水平であった。その上位にはまた、褐灰色粘性土が8~10cmの厚さで堆積していた。その上位は、最大厚さ35cm前後の黒色粘性土や褐灰色土の堆積があった。この黒色粘性土の中位には第4洪水層が挟在していたが、洪水層直下からはイネの植物珪酸体が検出された平坦面や畝状構造がみつかっている。この黒色粘性土の直上に、女堀排土が置かれていた。

これまでの女堀の調査地点では、掘削排土下位に浅間Bテフラは確認されていたが、浅間粕川テフラは確認されていなかった。浅間粕川テフラが確認さ



第248図 女堀掘削排土と浅間粕川テフラ